

---

# 師匠と弟子

麻川

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

師匠と弟子

### 【Nコード】

N9034L

### 【作者名】

麻川

### 【あらすじ】

猫っぽい師匠と犬属性なんだけど本体は猫な弟子の話。

## 引き籠もり

眼の前に在るのは一枚の扉。

厭、実際にドアノブとか出窓とか周囲の壁と区切る為の溝がついて  
いる訳ではないので、寧ろ一枚の果てしない壁とか岩壁とか言った  
方が正しいのだと思うが、そこを取っ掛かりとして中に押し入るし  
かないならば、やはりそれは扉と言った方が正しいだろう。そう。  
俺は別に扉自体ではなく、その中に居る奴に用があるんだから。独  
りではどうしても完遂出来ない依頼なのだ。何が何でももう一人分  
手が必要。

…白状しよう。それはお前でなくちゃならないという指定は特に受  
けてなかったよ、だからお前が良いというのは俺のエゴだよこれで  
良いかこの野郎！！ あア！？ 未だ言わせる氣か！ クソ。良、  
い、か、ら、開け、ろ、っつー、の！ こんな業とらしく引き籠る  
ならもつと入り易くしろよ！！ せめて取っ手位着ける！ 厭、扉  
の絵だけじゃなくちゃんとした入り口をさア！ あああ面倒臭エな、  
時間がないんだよ遅刻したら違反金払わなきゃなんないだろうが！

……クソ、こんな事で力使わせやがって！ 『命ずる、我の前に  
開かぬ扉は許さない、開ける』クソ莫迦！ よし入るぞ首洗って用  
意しとけよ、ってんだこりゃ！！ てめえ巫山戯やがって何でまた  
扉だよ御丁寧に今度は取っ手着きか！ こんなトコで要求訊くなら、  
寧ろ眼の前に来いよ！ 『命ずるぞ、開け』！ ……何だよ花瓶な  
んかどーしろっつーんだ！？ 『消えろ』！ ぐあーッ、ヒヨコ  
？ 全然和まねエよ、同じ黄色なら寧ろお前が出てくるべきだろ！  
???

…。

結局散々恥ずかしい台詞を言わされしかもそれを訊いてないという羞恥プレイを施された挙げ句に当の腹立たしい黄色頭は依頼人の処へ時間に余裕を持って現れていて見事依頼を終らせ、終った後も俺の慌てた様子を眺めて悦に入っていたというのは、もう思い出したくもない過去として記憶の底へ重石を着けて沈めてやりたい。

「ねー、出て来てよう」

「…」

「あなたが遅刻しそうになってまで僕と一緒に行きたい、ってそんな可愛い事言ってくれるから、もっと言って欲しかっただけだってばー！」

「…」

「お願いしますー！ 顔見たい声聞きたい触りたい抱きつきたいーッ！ 何ならまた猫になっても良いから僕から君を取らないでー！

禁断症状が出、

「待て止める今出るから！！」

終劇 (040922)(080326改定)。

## 子守唄と暖かな寢床。

手を伸ばす。髪に触れる。真っ直ぐで絡み難い性質の髪は梳いていく指の隙間を流れ落ち、間から覗く耳は赤く染まっていた。照れながらもどうして良いか解らずに、わたわたと手を動かしたり無駄に力の入った肩が楽しかった。自分より小さいのは良い。それだけでこちらに余裕が出来るし、何より一方的に顔が見れる。手を離す時は名残惜しさを掻き消す為に、わざと髪を掻き交せてクシャクシャにしてやる。

そして、頬を染めて怒り出す姿に笑った。

なのに。

「……何でこんなに無駄にでかくなっただろーなア？」

アドバンテージを奪われた気分だ。

「？ 何か言った？」

髪に頬を擦りつけたり背中から腹に廻す手は緩めずに、尋ね返された。

「いや？ 別にうぜエとかうぜエとかは思ってねエよ？」

聞こえなかったらしい言葉を消去して、だからとつとと放せというニュアンスを強く持たせた言葉に変更してみた。拘束されながらも偉そうな言い方が可笑しかったのか、軽く苦笑するように吐き出された吐息が首筋に掛かった。

思わず軀を震わせる。失敗した。ここまで密着していたら直に伝わってしまう。案の定耳元へ降りてきた唇からはからかうような声が紡ぎ出された。

「昔みたいに頭撫でてくれないの？」

大好きだったのに、と嘯かれる。ムカつく。

「そーだなー…。昔みたいに小さくて可愛かったら撫でてでも遣りたくなっただが、生憎こんな莫迦デカイ野郎相手は触りたいと思わねエよ」

「酷いなー。幾ら僕でも傷付くよ？」

「嘘こけ。なら、お望み通りその頭グチャグチャにして遣るからとつとと放せつーの。慰めてやるよ」

「ヤダな、もうちょっと動かないでてよ。もう直ぐ雨降ってくるから、そしたら寝ちゃっても良いからさ」

ぎゅぎゅー、と肩に顎を置きながら、体重をヴァインディエタの軀を曲げるように掛けてくる。自然、軀同士がくっついて心音すら判りそうになった。

「雨の音も僕の心臓の音も、聞いてると眠れる気がしない？」

セオの、ヴァインディエタより一廻り大きな腕と一緒に掴まれた手が僅かに動いた。

「…眠れる気が、しない？」

（…もしかしくなくても、）

気付かれてたか。ここ暫く寝付きが悪く、無条件で眠りに着ける雨を心待ちにしていた事を。常と変わらないように気を付けてはいたのだが。

何時の頃からかこの、図体ばかりデカくなった犬ッコロみたいな男は、ヴァインディエタの不調に気付くようになった。初めの頃は不用意に口に出したお陰で喧嘩を勃発させたりして余計な体力を使わせたりしていた癖に、今では気付いている事を匂わせながらも、過度の干渉はしてこなくなった。

（何処までが本当か判らない嘘は、俺の持ち味だった筈なのになア）  
一番騙し通したい奴が真っ先に気付き、それでも好きな様にさせてくれている状況というのは、何だか面白くない。掌で踊らされているような、遠くもなく近くもない絶妙な距離で見守られているような気分だ。

(コイツが)

無駄にデカくなるのが悪い。ほんの少し前までは自分の態度に一喜一憂していたのに。今まで加護をしていた手が、今では自分に向けられている気がする。

(もつと小さくいれば良かったのになア)

そうすれば、からかうような態度でこちらの本心を見せないまま、勝手に安心していられたのに。

(頭触りてエ)

でも触つてやらない。喜ばせるのはしゃくだ。正しく言えば、触る事が存外好きな自分を喜ばせている事で喜ばせるのは。

「きつと、雨音を聞きながら寒い中で寝るよりも、暖かい所の方が良く眠れるよ」

「こんなクソ重い軀乗つけたまま寝られる程、寝付きは良くねエの」  
言いながらぐぐぐ、と背を(体重を預けていたセオごと)反らし、よりかかる、というより寧ろ毛布代わりに寝ッ転がっている様な態勢を作った。

「じゃあお言葉に甘えさせて貰うが、手エ出したらぶん殴るからな」  
「え」

「夕食はシチューとアイスが良い」

「ちょ、」

「……ちゃんと出来たら、ご褒美に頭撫でてやるよ」

「それは嬉しいけどっ、」

「じゃア、俺は寝るから。起こすなよ」

夕食のリクエストに応えるには、まずはヴァインディエタの下からどかなくてはならない。ご褒美を取るか美味しいシチューエーションを取るか、ジレンマで苦しめば良いのだ。

報復の為に慣れないながらも強請ってみせた所為か、僅かに体温が上がった。背中と腹と手が温かい。

「……お休み」

終劇  
(041028)。



## 医者嫌いの真相

ある日。常の如くに目覚めたら、頭と喉と腹が痛くて、ついでに呼吸も苦しかった。

「というか声を出すのも辛かった。

「…おはよー」

「…うわッ、恐ッ」

「頭が、痛い、よ。…何これえ？ 眼の前がぐらぐらする…」

「お前今日外出禁止。依頼とかはキャンセルして来てやるから、一日寝てろ。俺に近寄るんじゃねエぞ」

移したら容赦しねエ、言い放つ顔は嫌悪で満ちていた。

ああ、その表情は嫌いだな、と長閑に違う事を考えながら眼の前が暗くなる。

おかしいな、起きたばかりなのに。

眼が覚めるとルーデイルーディが枕元のナイトテーブルの辺りで何かをしていた。因みに服装は動き易そうな服にエプロンで、病人相手な為か、香水は着けていなかった。

「はろーん、セオクーん。…って、なに死にそうな顔してるの？ だあいじょうぶよ、直ぐに治るから。ただの風邪なんだし」

「あれー？ こんにちはー、妹さんー。…何で居るんですか？」

「あらあらご挨拶ね。仕事よ。誰かさんの病気の看病と家事をしに、ね」

これ飲みなさい、と渡されたのは温かくしたホットワイン・生姜入りだ。少しだけ口に含まと、ほんのりした温もりが喉に優しい。

「…ヴィは？」

「知らないわ。ちゃんとお金銭とかは貰ってるから、セオ君が何か心配する事は無いわよ？」

「…いえ、そういう事じゃないんですけど…」

「この家には居ないわ。治るまで付きつきりで、って事だったから、多分治るまで戻ってこないと思うけど」

「…そう、ですか」

この家で、住人以外を見るのはこれが初めてだった。何となく自分が特別扱いをされたがっていた事に気付いて、少し恥ずかしい。

聞く処に寄ると、ルーディルーディは会社に傭兵のみならず、家政婦や家庭教師としてのエージェント登録もしているのだそうだ。傭兵の他にも聖職者や発掘屋としての仕事を持つ兄達同様、副業は良い暇潰しになるらしい。

三人纏めての依頼料を払えるだけの依頼人というのは余りいない。且つ、達成率はほぼパーフェクトのチームであるからこそ依頼は選ぶのだそうだ。気に入った依頼が無い場合は、各々副業に励んでいるらしい。

「で、家政婦として仕事をしに来たのよ。炊事洗濯掃除に看病、一通り出来るから安心して良いわ。っていうかあの阿呆よりはよっぽど安心よ」

因みに必要経費として色々買って来たわ、体温計とか。にこやかにけれど眼は笑ってないその煌めく笑顔が素敵です。セオは体温計なる物はよく解らなかつたが、ヴァインディエタが原因で怒っているらしいルーディルーディに潔く感服した。

珈琲が飲みたいです、と主張してみたら刺激物は厳禁よと笑いながらも断固として言い切られ、珈琲の代わりに、と淹れてくれたお茶で喉の渴きを癒しながら世間話（主にヴァインディエタの昔話やその他）（公司を通じた依頼では無く、ルーディルーディの家にヴァインディエタが直接来たのだ、とか、長男は含みを持った笑い顔を

しながら、次男はセオにワインの差し入れを持たせて、そのワインを先程使ったのだ、とか）をしていると、ドクトルがやって来た。前もってヴァインディエタが喚んでいたらしい。

ルーデイルーディは往診を頼んでいる事しか知らなかったのだろう、ドクトルを見て慌てて珈琲を用意を始めた。

「ああ、お構いなく。何処かのクソ餓鬼に身内割引してくれと研究途中に引つ張り出されただけですからね、余り時間はないので」

「あら、折角お医者が来るって聞いてたから、経費でウィッチハウスのケーキ、用意してたのに要らないんですか？」

「さて、早く診察を終わらせてティータイムとしましょうか。一緒にどうです、ミス・ルーデイルーディ？」

ヴァインディエタの甘い物好きは保護者であるドクトルに似た物らしい。

「喜んで。珈琲も一等のヤツ、使っちゃいましょうね」

二人揃ってニヤリと笑い合った後、移るといけないから、とセオの部屋で診察が始まった。

「やあ、セオ君。元気でしたか？」

「お久しぶりですー。ドクトルさんこそお元気そうですね」

「はは。生憎と私は病原菌に嫌われているらしくてね、今までに病気という物に掛かった事はないんですよ。医者として、自分で薬の成果を試せないのはどうかとも思いますが」

「いえ、結構辛いですから掛からない方が良いと思いますけど」

「そうでもないですよ。私はアカデミー時代に、学生ならではの仮病での授業サボリをしたかったです。けれど、実際に症状を知らない所為かどうも下手だね。よくアリストリア と、解らないですね。そう、図書館の館長です。寮の監督生でもあったので 布団から引きずり出されてましたたよ」

「 流石、ヴィの保護者ですねえ。嫌いな依頼人に当たった時と反応が同じです…」

見た目や口調は正反对だが、意外とこの保護者と被保護者は似てい

るらしい。常に煙草の匂いを纏っている処や甘い物好きな処、フェミニズム、ヴィの言葉の端々から察するに、鍛え方も似ているようだ。理論から実践まで余さずスパルタな処とか。然りげなく、と明白に、の違いは在るものの、真逆な様で驚く程似ている。

「……………。保護者じゃないんですがね…。ただの身元引受人ですよ」

ドクトルは反論しようと口の開閉を繰り返したが、巧い論破を思い付かなかつたらしい。おもむろに持って来た鞆を開いて治療道具を取り出すと、厳かに口を開いた。

「さて、診察をしましょうか。ちゃんと具合が悪い事が解って良かったです。いきなり倒れて、下手に医者と呼ばれたら面倒でしたからね」

話を逸らす方法も全く同じだ。セオは思わぬ発見に微笑んで、しかし指摘はせずにドクトルの話題に乗ることにした。

「や、初めてでも解りますよ、これは。頭がぐらんぐらんしますし」

「そうですね、それが普通なんですけどね。偶に、解らない奴が居るんです。そういうのは自分の不調を把握出来なくてね、唐突に倒れるんです。迷惑極まりないですよ？」

「…実感籠ってますねー。何て言うか、身近でそんな人を知ってるんですけど…」

「ヴァンがそれですからねえ。しかも薬が使えないのに、喚ばれた医者が投与したお陰で大騒ぎになったからなあ」

ははははは、と妙に力の籠った笑い顔が恐ろしい。

「えーっと、ヴィは薬効がないんですかー。『この家には風邪薬と必需品すらないのね！』ってさっき妹さんが怒ってたんですよー」

今度はこちらが話を逸らす為に、ルーデイルーディとの世間話であった事を聞いてみた。確かに効かないならば薬は必要無いだろう。「違う違う。逆ですよ、効き過ぎるんだ。その時は解熱剤としてアスピリンを打たれたんだけど、呼吸困難で死に掛けて」

セオには言えないが、ヴァインディエタの、人間として有り得ない骨格や染色体を調べようとしたその医者は、危うく機密保持の為に消され掛けた。保護者として喚ばれたドクトルのもっていた遺産で記憶を消し、ヴァインディエタには適切な治療を施した事なきを得たが、下手したらそのまま消されてしまう事も有り得た。職業熱心ならば特に。

セオほどではないが、彼が造られるまではヴァインディエタが第一次機密だった。失敗作だと判明していても、それ以外の実験体は全て死んでいる。よほどの過失がない限り、廃棄に反対する一派は世界政府にも公司にもいた。

「さてと。唯の風邪のようだね。一応君には薬を出すけれど、少しでもおかしいと思ったら、直ぐにルーディちゃんに言いなさい。ヴァンは、君が治るまでこの家には寄り付かないと思うから」

「移ったら大変ですからねー。ヴィ、文句言いながらも健康に気をつけてますし。あの人の性格からして不思議だったんですよ、怪我とかはほったらかしなのに換気とか栄養配分とかは完璧なのは」

「まあ、私の調査は高いですから。あいつは合理主義でもありますし」

「無駄な事とか大ッ嫌いですからねー」

ルーディルーディと仲良くお茶をして帰ったドクトルからの治療費と、必要経費として請求されたルーディルーディの請求書に、ヴァインディエタが容赦無くセオの仕事のランクを引き上げるまで、あと一巡り。

終劇 (041103)。(080406 up)

## 三千世界の鴉を殺し

朝起きたら、一番好きな人が隣で寝ていました（因みに服を着ている事は即座に確認）。

ここで思う事は。

？あれ、いつの間にこんな仲まで進んだっけ？

？あー、幸せー。起こしてもう一頑張り。

？夜ばいに来てくれるなんて嬉しいなア。

（何だっけ、この状況）？これは夢だ。

この雰囲気はこないだ読んだ本に書いてあった歌と似てる。確か

『思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ、…』

（…何だっけ？ まア良いや。ふかふかだあ。気持ち良いなあ）

腕の中に在る暖かな重みに気を良くして、尚更抱き込むように力を込める。

（夢って…深層意識の表れなんだっけ。だったら寧ろ、もっとこう、密着度が高い方が、）

抱きしめる身体は暖かく柔らかだ。

（……ちよつと待って。何か、夢にしては感覚がリアルな気が…？）  
背に廻っていた腕を解き、その顔を触ってみる。暖かい。

（暖かい）

全ての動作が止まった。

次の瞬間、勢い良く心臓から血が流れ出した。主に顔と触れていた箇所。

（えええ待つて何この状況何でこの人がこんな側に居るのさああ！？）

動揺の余り今だ頬を触っていた指先から振動が伝わったのか、ヴァインディエタが僅かに身じろぎ、呻き声上がる。この時点で既に、セオの心拍数は大混乱だ。大爆走といっても良い。瞼が微かに揺れ、緩く持ち上がった。

「……」

「……」

視線が合う。が、動かない。

「……」

「ええと、…僕何もしないからね？」

先手必勝とばかりに早口に言ってみた。その台詞を受けて、何処か茫洋としていたヴァインディエタの眼がセオの位置で像を結んだ。ぱちりぱちりと数回瞬きを繰り返し、返された言葉は。

「……おはよう…？」

（何かこの人が異常に早起きする理由が解った気がする…）

寝起きが悪いというか、極度の低血圧なのだろう。回転数が常に比べて格段に落ちていた。こちらとしては幸いだ。それにしても掠れた声が心臓に悪い。具体的に言えば、けだる気に話す仕種ですら、顔とあと言葉には出来ない場所に血が集まって行きそうだった。

内心バクバクなセオには構わず、ヴァインディエタは再び眼を瞑った。

「ねむい…」

そうですか。是非寝て下さい、この状況を不思議に思う前に。直ぐに出ていくから、何もしないからどうぞ眠って！

「まだ、だいじょぶだろ…？ おまえも、ねてるよ…」

腕が、伸びた。

（きゃー！ 僕今抱き締めれてる何これむむむ胸が当たっ、！！！？）

「んむ…」

セオを抱き寄せたのは良いものの寝心地が良くないのか、ヴァイン  
ディエタはセオの頭を抱くように左手をセオの頭の下にして横を向  
き、体勢を整えて更に眠りを貪ろうと緩く深く息を吐いた。セオが  
硬直している間に呼吸が深くなり、眠りに落ちた事が解る。

（どうしよう何か美味し過ぎて逆に手が出せないよ…）

取り敢えず起きてから即座に殺されないよう、少しでもこの幸福な  
時間に永く在れるよう（セオは自分の理性にさほど信用を置いてい  
なかった）、戦々恐々と背に廻されている腕を解いた。

（あーあ、勿体ないなあ…）

殺されるのは勘弁だが、それでもこのチャンスを見逃すのは勿体な  
さ過ぎる。鴨葱処か寧ろスリーピングビューティだ。お膳立ては何  
もかも整っている。障害という蔦は勝手に退き、自分は最後の鍵と  
なるキスを贈るだけ。

蛇足ながらセオはこの話が大好きだ。実際に想いを馳せる人は自分  
を待つてなぞくれず、進んで自ら枷をぶち壊す気性だったので。唯  
一の人を待ち続けている女性という設定は何処か面映ゆい。シチュ  
エーション等は全く好みでは無いが（百年も素直に眠り続けるなぞ  
考えられないし、動いて考えて生きているからこそ、その生き方共  
々に惹かれるのだし）。

毒喰わば皿までな心境で、少しだけ、その身体を引き寄せてみる。

（うわ…、暖かいなあ…）

顔にかかった髪を撫で付ける様に梳き、次いで頬を撫でて輪郭を辿  
ってみた。

（ちいさい…）

身体は大体十代半ば頃で止まっているのだから、当たり前といえば  
当たり前だがそれにしても。

（片手で顔を覆い尽くせちゃいそうだよ…？）

眠る時でも外さない、指の部分を落としてある手袋越しに体温が伝  
わってくる。



何故か涙が出そうだ。

（もう少しだけ）

どうか。これが紡ぎ車と薫の魔法ならば、もう少しだけ解けないでいて欲しい。

（こういうの、何て言うんだっけ…。『果報は寝て待て』？ 『待てば海路の日和あり』？）

ニュアンスは判るが、状況的には『棚から牡丹餅』だ、という突っ込みは何処からも入らない。

（もう少しだけ）

セオは静かに、眼を瞑った。

何の脈絡も無く唐突に。

「うわあっ…!？」

ヴァインディエタは身体を起こした。セオを弾き飛ばす勢いで。その、貯めも事前動作も絶無な行動にセオは驚き、自ら寝台から落ちた。先程とは全く別の意味で心臓に悪い。落ちた際に何処かに打つけたらしく、頭が痛んだ。

（やばい、起こした？ 怒った？）

くつついていても起きた様子はなかったから、その驚きは一入だ。伺うように顔を見ても、その顔は影になり、視線どころか表情も判らない。

再び石化しているセオには構わず、ヴァインディエタは起き上がり、って窓を開け放つと（因みに確信犯かは判らないが、セオを踏ん付けて）部屋を出て行った。一度もセオを顧みる事なく。

（まさか…、無視攻撃！？）

冗談ではない。

ヴァインディエタは、基本的に余り怒らない。自分で対処出来る範

困ならば勝手にやってくれ、というスタンスだ。その代わり自分の力量を見誤り、他人迷惑を掛けた場合は徹底的に怒られる。罵詈雑言の限りを尽くして怒鳴り散らされ、メタメタに凹ませた後で対処の仕方を伝授する（因みに、今まで利用した事が無く方法が判らないとかそういう場合は、一度だけは説明してくれる）（その場合は特に怒鳴られたりはしない。悪しからず）。そして、二度目の場合は漏れなく報復が着くのだ。口で言っただけなら解らないならば寧ろ身体で！ という理屈らしい。

食事抜き（但し買い物はさせる）・長期依頼（Sランク）・館長との茶会・ドクトルの手伝い、etc、etc…。

子供の喧嘩の様だが、セオには無視という形での報復が一番堪えた。常にはセオ任せの食事も（自分の分だけを）一人で作り一人で食べて、会話どころか視線すら合わせてくれない。謝ろうが泣こうがヴアインディエタの気が済むまで徹底的に無視だった。未だ食事を（一人寂しく）とっているのに就寝時間だからと灯りを消された時は、思わず本気で泣いた。

その度重なる仕打ちに耐え切れず、ウィッチハウスのケーキ・菓子類を全て買い占めてヴアインディエタの目の前に据え、しかし包装は解かずに謝り倒したらあっさりと赦してくれたが。

ケーキに眼が眩んだだけでもしれないが、精神的にも金銭的にも非常に辛い事件だった。

（僕の報酬また全部お菓子に消えるの…！？）

自分では食べられないのに。甘ったるい匂いですら倦厭ものののに想像するだけで頭が痛む。けれど何とも皮肉な事に、甘い物を食べると浮かぶ笑みは、極上なのだ。一方的とはいえ喧嘩明けなら（喧嘩明けと言わず日常的にも）見たいに決まっている。いやしかし、極稀に見れるから希少価値が高いのだろうか、と新たな命題に取り掛かる前に思考を引き戻す。じっくりと考えてみたい気がしないでも無いが、先ずは先にやる事が在る。

謝罪と赦した。

（昔の人は巧い事を言ったよね。『天国から地獄』）

来たる甘い物漬けの生活はセオにとっては煉獄の底だ、オアシスのない灼熱の砂漠だ。

「辛過ぎる……！」

頭が痛い。可能な限り素早く謝り倒して、ついでに出来れば経過説明をもらって、赦してほしい。財布が泣く前に。

「お早うございますー……」

いざ行かん、という意気込みは勇ましいが掛ける声は恐る恐るだった。

「……あれ？」

居ない。既に薬缶は火に掛けてあり、窓も全て開け放ち済みだ。新聞はテーブルの上に置いてある。洗面所だろうかとも思ったが、念の為ドアの鍵と靴を確かめてみる。どちらも昨夜のままだった。

「おかしいな……？」

何故ドアの状態まで覚えているか少し疑問に思うが、今はヴァインディエタが先決だ。首を傾げつつリビングに戻ると、いつの間にか椅子に座った状態でテーブルに突っ伏しているヴァインディエタを発見した。

「ヴァイン？」

「……」

声を掛けても返事は返らない。やはり、怒らせてしまったのだろうか。

「ヴァイン、あの、」

依然として何も反応は無く、セオは思わずじわり、と涙を浮かべる。

「あの、……その、」

一歩テーブルに近付く。避けられてはいないらしく、態々席を立ちしなかった。何を言えば良い。

（どうしよう、何て言えば良い？　一緒に寝てて御免なさい？　でもまた機会が在ったら絶対やるし。触って御免ね？　これだって以下同文だ。寧ろそれ以上だっと思っていた）

（怒ってる…よね。でも謝りたくないんだ。我が儘だよね。僕をちゃんと見てよ。僕はここに居るんだよ？）

泣きそうになりながらも堪えて近付く。考えが上手く纏まらない。頭が痛む。ヴァインディエタは、動かない。

（何て言ったら良いの）

（解らないよ）

（教えて）

（無視しないで）

その、つい先頃まで触れていた髪に、恐々と手を伸ばす。

「ヴ、」

「　うああッ！？　何だ誰だいきなり触るな！　…つて、セオ？」

跳ね起きた。先程と同じく、絡繰人形のような唐突で不自然な動作だった。しかし珍しくも本気で驚いたのか、幾分と息が乱れていた。

「どうした、何で泣いてる」

其の声音に特に銜いはない。随分早いな？　と続いた言葉にも躊躇いはなかった。ほつ、と安堵すると共に、怒りが込み上げてくる。届かないかと思った。

「なっ、何だじゃないよ！　お　、怒って、…ないんだ、ね？」

「朝っぱらから怒れるほどテンション高くなエぞ俺は。どうしたよ、…何だ、怖い夢でも見たか？」

変わらない。いつものヴァインディエタだ。巫山戯た様に、しかし少しだけ本気の色を覗かせて。

「見てないよ貴女が居るのに！　でも、じゃ、あ、何で返事してくんないのさア！？　怒らせたかと、心配し、たの、にー！」

「あア？」

半泣きになりながらも言葉を尽くして説明する。上手く言えた自信はないが、ヴァインディエタはどうか理解してくれたようだ。最

後まで聞き終えると、気まずそうに頬を掻いた。

「うう、何っーか…、」

何処か生真面目そうな顔付きを作り、困ったように言い継ぐ。

「その、どうも俺は寝起きが悪いらしくてな？ アカデミーで聞かされたんだが、寝くたれてる途中に起こそうとすると、障害排除目的での攻撃が常と変わらない行動をするかはたまた何をするのか、まッツたく、予想もつかない様らしくて、…俺の知らない内に、『放って置くのが一番だー』という結論に達する程、それ位寝起きが悪いらしいんだ」

……、俺は全然解んねえんだが。悪かったよ、とあつけらかんと言  
い放った。

「気が付くと仕度が調ってんのは楽で良いんけどなア」

セオの受けた恐怖と怒りを全く気にせず、寧ろ気楽そうにヴァイン  
ディエタは告げた。

「そん、な（気楽そうに）、」  
言う台詞ではない。断じて。

ヴァインディエタは悪い悪いと苦笑いをした後、謝罪のだろうか、  
いつの間にか沸いていた薬缶の湯で緑茶を淹れて一口飲んだ後で珈  
琲を作ってくれた。

「あー、うん。その分じゃ、よいは覚めたみたいだな。」

話が急に跳ぶのはヴァインディエタの癖だ。慣れるまでは戸惑うが、  
全部理解すると全て話題は繋がっている。特に気にせずに続けた方  
が直ぐに疑問は解決されると学んだ。

良い・宵・酔い。この場合は、酔い、だろう。余程可笑しな顔をし  
ていたのか、また少し笑ってヴァインディエタは話を続けた。

「昨日の遅くに誰に飲まされたんだか、ぐでんぐでんに酔っ払って  
帰って来たんだよ、お前。しかたねえから布団に放り込もうとすれ  
ば無駄に懐くし五月蠅エし、揚げ句一緒に寝ようときた。面倒臭く  
なって猫になったら赦してやるつつたら文句も言わずになったか  
ら、俺の部屋に連れてったんだ」

放心するセオは気にせずに続ける。

「…何処で飲まされたかは知らねエが、自分の限界覚えねエとどっかで力モにされるぞ」

段々と記憶が蘇る。濃密な酒の臭いと絡み付く体温。そしてそこで拳がった話題。既に力モられて、しかも酒の肴が僕とあなたの進み具合だなんて、口が裂けても言えない。因みに相手は例の三兄弟とドクトルでした。最恐タッグだ。酒に強く話しも巧い。

再び、開店以来二度目の前品買い占めという（不名誉な）伝説を作らないで済んだのは良いが、いつの間にか昨日の酒盛りは僕持ちになっただけらしく、財布は既に空だった。何もかもに愉しくなっただけで、ご機嫌で話題を提供した後に、意気揚々と帰って来たのだ。

記憶を思い出すと比例して頭痛が酷くなり、頭が痛い病気かも看病してよと泣き付いたら、それは唯の二日酔いだ莫迦め、大人しく水分取って寝てるとんだと宣告された。

『酒は飲んでも飲まれるな』という由緒正しい格言を知らなかったツケは随分と高く着いたらしい。

手に入ったのは空の財布と酷い頭痛、握られた弱みとあの人の柔らかな感触。

……意外と悪くないかもしれない。

終劇（041024）。

高杉新作／都都逸 『三千世界の 鴉を殺し 主と朝寝が してみたい』

## 掃除（あるいは過去の清算）

「良いか、作業員AとBは先ず始めに最深部への突入だ。Aが侵入経路の確保、ポイントまでの障害物の排除だ。BはAの後続に着き、周囲に警戒しろ。最短経路外の障害は無視して良い、トラップの可能性がある。ポイントへ到達したら速やかに鍵の破壊、もしくは侵入入口を破砕して外部との接触を図れ。作戦は理解したな？ では開始する」

「ごほッ、作戦せい、ぶへッ、こうッ！！ 新鮮な空気の、へくちッ、確保完了しましたー！」

「ご苦労、作業員A。結構豪快な音がしたが、作業員Bは大丈夫か？ 良し、無事だな」

「……………アンタ、ねえ……。これの、何処が、無事に見えるの！？ とつとあたしの上の本とか退かしてよ！！ 押し潰されて死んじやいそうだわ！」

「あつ、大丈夫ですか妹さん、今助けますね！」

「あたしの名前は妹じゃ無いって言ってるでしょうが！」

「そうだそうだ助けなくて良いぞー、掃除する時にヒールなんか履いてくるそんな莫迦は」

「っ、普通家の中は土足禁止でしょうが！ 脱ぐならそれまで何履いてようがあたしの勝手でしょう！」

「…脱ぎたいなら脱いでも良いけどな、3歩で埃まみれになるぞ？ つかちゃんと掃除だつっただろうが、何でそんな気合い入った格好なんだ？」

「……………黙秘権を行使するわ」

「……まあ良いんだが。俺の　じゃ小さいな、あいつの服借りてこいよ。折角綺麗なのに汚すなよな！もったいない」

「そうですよー、凄く似合ってるのに」

「……着替えくらい持つてきてるわよ。でも　失敗だわね、ここまでこの家が汚いとは思わなかったわ。……大体、何で玄関から入って直ぐの部屋までに態々通路を作らなきゃなんない訳！？」

「いや、俺もここまで酷いとは思わなかった。報酬は根こそぎぶん取ってって良いぞ、そっちの方が助かるし」

「じゃあ取り合えず、着替える部屋を確保しますねー。僕あっちのお二人の方見てきますー」

「あ、良いわよ。後ろ向いててくれればここで直ぐ着替えるわ」

「莫迦か、仮にも女なんだからもう少し恥じらえよ。無防備に男の前に肌晒すな」

「あら、別に平気でしょ？　アンタ女子供には優しいし。その子は言っただけでもう真っ赤じゃない」

「……せ、せめて僕は外に出てますー！」

「……可愛いわね」

「……やらねエぞ」

「ま、アンタにはそんな偉そうな事言われたくないだろうけどねー、あの子も」

「うっせ、早く着替ねえと兄貴達が来るぞ」

「解ってるわよ（そこで態々窓辺に行ってくれる処が優しいって言うのよねー、本人無意識だけど）」

「全員揃った処で、分担を決めるぞ。文書の類が報酬になるかも知れねエから、長男・妹はコイツと本全般を運び出して、写しは廃棄、本は図書館のマーク付きとそれ以外を別にして陰干し。次男は俺とガラクタ整理だな。判断に困ったら残しとけ。一旦全部外に出してからだな、一部屋ずつやるか。じゃ、頑張れよー」



「次男はこれが何か識ってるよな、解体の仕方は解るか？ このままじゃ危な過ぎて売れねェんだ。腕の良い信頼出来る技術屋ジャンクに心辺りがあんなら、持ってけば良い防具とか作ってくれるぞ。素材的にはランクは低いがちゃんとした遺産だから。螺子はここ、外装はそこ、それ以外はコッチに別けてくれ」

「……俺達はあなたを信用しています」

「……ああ、解ってるよ。アンタ等の妹は面倒事には巻き込まない、安心してろよ」

「……はい」

「ところで、あの格好はあいつに見せたかったんだろ？ 悪い事したな。さつき洗濯に出したから帰りには届くだろ。重てエ資料系は送ってやるから、着替えて帰るように言ってくれるか？ 俺だと喧嘩腰になるからな」

「……」

「喋らなくても良いから、判らないことがあつたら教えるよ」

「……」

「じゃ、そっち頼むな」

「……」

「んあ、……。あいつ等か……。あー、ちょっと見てくるが、お前も行くか？」

「……」

「なら行くぞ、あっち、だな。……何か厭ーな予感すんだよねー……怒鳴り声聞こえるし」

「……よ、だから何かもう苛々するわね、返事はハッキリしなさいようー！！」

「ッ、てめえ開ける時は注意しろよ危ねえだろが！」

「あら良い処に！ ちょっとアンタ何な訳これ！？ 何で禁書とかまで在るのよしかもこれアンタの字じゃない！ 本当にこんなの貰

って良いの!??」

「あ、ちつと落ち着け。それでソイツの襟首放せ締まってるから。死ぬぞ。おい長男、せめて振りだけでも止めるよ見物してないで! 笑い死ぬつもりか!??」

「ど・う・な・の・よ!??」

「解った答えるから放せ、つつてンだろ、この、莫迦、女ア!?!」  
「ったいわね! 何よアンタやる気!??」

「やりませんやるわきゃねえだから詠唱止める長男獲物下ろせ次男、家が壊れるだろ、ためえもいつまでもゴヘゴヘ言つてンじゃねえよこの間抜けエ!?!」

「しょうがねエから、質問タイムだ。休憩にするぞ」

「はい、緑茶ー。妹さんは珈琲砂糖入りミルクなしですよ、次男さんはミルクティ砂糖なしで。長男さんは珈琲と、申し訳ないんですが、加減が解らないので砂糖とミルクは御自分をお願いしますねー」

「おやありがとう、全く君の淹れてくれる珈琲は絶品だね、何処ぞの誰かには見習って欲しいものだよ。いやいや別にお前の珈琲が不味い訳じゃないぞ妹よ、ただこの子の淹れる珈琲が美味し過ぎるだけだから。まあうちの弟の淹れる紅茶にも及ばないけれどね。それも味というものだよ」

「……お前、いくら何でもそれは入れ過ぎだろ。珈琲っつーより寧ろ砂糖味の牛乳だ」

「人の味覚にケチをつける気かい? 君には言われたくないねこの甘味大王が」

「あア!??」

「あー、ハイハイいつもながらとっても美味しいわー、幸せー!! ーで、丁度なんだ処で聞きたい事があるのよねーうふふ」

「きゃー怖いわーあたし泣いちゃうー」

「……バラすわよ」

「さて何か疑問点があるんだってな言ってみる速攻解決させてやる」  
「……」

「ああ泣く程に怖い物が居るんでしょ？ 本当に大丈夫？」

「大丈夫ですうお嬢様ー」

「そう？ 無理しないで良いのよ？」

「大丈夫ですうお嬢様あー」

「なら質問させて貰うわね？」

「ええ幾等でもどおぞお？」

「何でアンタの字なのこの写本」

「ドクトルに課題つつてやらされたんだよ（つか字を覚える為だが、利用されたし当たってるだろ）。ここにあるっつー事は直ぐには使わないから持つてって構わない」

「何でこんな高度な魔導書があるの？ あたしも探した事があるけど、全然見付からなかったのに」

「アカデミーの図書館は一般人立ち入り禁止区域があつてな、そこに魔導関連は全部在るんだ。胡散臭いのから出版禁止になったのまです。入るには馬鹿高い献金が必要だけどな。原則持ち出し禁止なんだがドクトルが俺に読ませて書き出させたんだよ」

「……。そこ等に転がってるガラクタは何？ 最低ランクとはいえ遺産よね？」

「どうせ廃棄されるだけになっても構わないだろ。発掘に参加して盗つて来た。研究は済んだからバラして売って良いそうだ」

「……この家何時から掃除してないの」

「ここはドクトルの資料置き場兼研究所だったんだけどな、俺がアカデミー卒業して2年位か？ ネズミが出てな。多分それ以来入ってねェんじゃねえの？」

「何でここ廃棄しないの……？」

「あのな、いくら写本とはいえここにはパードウェル錬技魔術式百選全書改訂版とか古代生物体系史とかあんだぞ？ 選り分けて処分しなきゃコッチが捕まるっつーの。あ、持つてくのは構わないけど

違法だから捨てる時は焼けよ？ 万一捕まっても無関係だから俺等は」

「………… お茶受けにケーキ食べたいわねー」

「ウィッチハウスに新作出てたぞ。タルト」

「あ、それ食べたわ。嵌りそうよね」

「和んだな」

「和んだわね」

「もう質問はねエな？」

「あー、あるんだけど、良いかい？」

「……んだよ長男？」

「はッ、君に質問だとは言って無いだろう？ 自意識過剰なんじゃないかな？」

「……………（怒）」

「わー、待つて下さいストップー！ 妹さんも止めないと資料系全部焼けて消えますよ！？」

「アンタ達止めなさい！！ これは仕事よ、私情を挟まないで頂戴！」

「わー、もう見事な位欲望に正直だなあそこまで行くと反対に感心するぞオイ」

「ははは僕が愛しい妹の願い事を聞かなかった事があつたかい？ 宣言しても良いが、今までもこれからも未来永劫・空前絶後、在り得ないよ？」

「……この、妹莫迦共め……」

「はいはいはい玉露とウィッチハウスのケーキセットですー、どうぞ妹さんも。で、男性陣もお代わりとお茶受けです。それで何の質問でしたっけ長男さん？」

「ああ……いや、報酬としてこれ等を貰っても我が家には置き場がないから、寧ろこの家の訪問許可を貰った方が良くいのではないかな。指定して貰えれば僕等が使っ物の一部屋に詰めるし、定期的に掃除もしよう。我々の代表はこの娘だからね、提案としてどうか

と」

「んー…、そうねー、そうして貰えると助かるんだけど…、こればかりはドクトルに確認を取らなきゃね。　　と言う訳で、報酬の変更が可なら都合をつけて貰えるかしら？」

「んー、それは平気だ。お前等の報酬やなんかの指示は俺に一任されてるからな。その場合、地下と2階には上がらなければ1階は自由に使って貰って構わない。鍵は玄関のだけ渡すか、1階は鍵掛つてないから。掃除も1階だけで。あと、出来るなら読破済みのは処分してくれ、その内溢れ出して来るから。それ以外は特にねエな、条件はこれで良いか？」

「有り難い位ね。ドクトルはここは使わないの？」

「ネズミが出なくなったら使っくんじゃないか？」

「じゃ、ご挨拶と差入はその時で良いわね」

「そうだな。それと、手入れはこの庭は含めないで良いぞ」

「あ、待つて。見映え良くするのに草刈りだけでなく造園も込みならやらせて貰うわ。兄さんガーデニングの場所欲しいって言ってたわよね？」

「」

「手を入れる分には構わないがな。コツチに領収書廻さねエなら」

「じゃあ、期限はあたし達が完全読破するまでで。内容は掃除（庭込み）と管理、文書の処分、ね」

「「契約、成立」」

「おら休みは終りだ野郎共。取り合えず今日の所は、この家は電球切れてるし、夕方になったら終りだ。夕食は奢ってやる、コイツが」

「ええ、聞いてないよ！??」

「何だお前依頼途中の奴等を腹減らせたまま帰らせるつもりか？」

「違うよ、買い物行かなきゃならないから僕は先に帰るね」

「あ？　…ああ、うん。だから、明日からは仕事振りに因るがな。

俺等が片付けはするから仕事に掛れ、今日中に一通り判別は終らせ

ろよ  
「

「「「ういーッす」「

「やるぞてめえ等！」

終劇 (041008)。

## 真冬の溶けかけたチョコミントアイスクリーム

「何でお前こんな窓全開で毛布被ってんだ？ 今の外気温解ってるか？ 氷点下だぞ？」

「あ、お帰り！ 心配してくれてるの？ 嬉しいなー」

「俺がたった今外から帰ってきたのに今度は室内がクソ寒いからな、その原因如何に因つてはどうしてくれようか方法を絞り込んでんだ。100字以内で簡潔に答えろ、さもなきゃその毛布引ツ剥がして外に放り出してやる」

「厭、えーつとね、今日寒いでしょ。だからアイスを食べようと思つて」

「待て。何でそこにアイスが出る？」

「え？夏は鍋で冬はアイスを食べるのが慣習なんですよ？僕だって日々勉強してるんだからね！」

「…。まあ、良い。それで？」

「で、食べようとしたんだけど、外出たら寒いでしょ？ だから家で作ろうと思つて材料あつたから作つただけど、この部屋で宴会やつた時に誰かが冷蔵庫壊してたらしくてさ、後は冷やすだけだったんだけど仕方無いから室内冷凍庫にして冷やしてたんだ！。ちやんとお風呂とお茶の準備はバッチリです！ 頑張つたんだよー、結構大変なんだねお菓子作りってさ」

「（やべエ、コッソリ直しようと思つて余分に仕事やって来たのに何でタイミング悪イかな、しかも）……お前が食えないだろ……」

「や、ミントで味付けしたから少しなら大丈夫だよきっと」

「薄荷、か……」

「……駄目、だった？」

「厭、駄目と言う訳じゃない。問題なしだ、だから態々力使うなよお前!!」

「ええ、だって美味しく食べて欲しいよ!」

「本当に、駄目って訳じゃないんだ。ただ、……そう、嫌な思い出があるだけで」

「どんな、て、聞かないから、ね、えとお茶でも飲む? こないだ貰ったお茶受けも出そうか、気に入ってたよね」

「大丈夫だから、先にお前が風呂に入って来い部屋暖めとくから。お茶にするぞ。80字以上オーバーしたのは、今回はそのアイスの8割りを俺に寄越すなら不問にしないとやる」

「うー。細かいよー」

「的確で簡潔な文章を作成する事は仕事上でも求められる技能だろ。始めたのは誰だ?」

「僕です。え、でもまだ固まってないよ?」

「部屋暖めて茶ア飲んでる間外出しとけば固まるだろ、食後のデザートにしようぜ」

「あ、そだね、そうすれば良かったんだ……。……。お風呂、行けます!!」

「おー、温まれよー。入浴剤柚子の使って良いぞー」  
「うううー、ありがとっ!!」

「……あー、阿呆な子程可愛いとは良く言ったもんだな。俗説鵜呑みにしてるっつー事は、教えたのあいつ等だろーな、ああクソ、今日はオムライスで良いか阿呆って書いてやる。……うあ、大人しく行ってくれて助かった!! 見せらんねエよこんな顔!! あー、恥かしいなクソ! ……取り合えず、先ず台所の片付けするか。そんでミルクだばだばの珈琲淹れて、…新しい豆使うか。部屋暖めて…、冷蔵庫早めに直さねエとなー。つか先ず買い物か? 買い置き全部使ったんだろーな。こんな大量に作ったら中まで凍るのは時間掛るのになア」



寒い駄目なくせにとか甘い全般駄目なくせにとかコッソリと年中行事を学んで自然にやろうとしたりとか。突っ込んでやりたい箇所は膨大だが、……誰の為にとか言われたら墓穴を掘るだけだ。最終的に嬉しい思いをするのはどちらも同じだが。

買い物に出た先で件の3兄弟に遭遇して散々からかわれて、結果好物のオムレツに書かれた『死ね!』という言葉と一番良い豆で挿れられた珈琲にどんな表情をするべきか迷った挙句、自分の密かな努力を知られたのだと気づき、結局はにかんだ様な微笑みを浮かべた。

「「あー、恥ずかしー」」

終劇 (040926)。

## 万愚節

「や、やっと終わったー。…えと、残り何件？」

「特Sが1、Sランクが3、Aランクが2にDランクが4」

「……まだ、そんなに」

「悪かったな後は俺がやるから先に帰れば、」

「良いだろー、とか言わないでね？ 僕がやりたいんだから」

「……好きにしろよ」

そつぽを向きながらも仄かに赤く染まった耳が嬉しい。何と言われようと懲罰として術を封じられた状態で放り出すなんて考えられない。

事の始まりは暫く前、抜ける様に腹立たしい程に晴れ切ったある朝の事だった。

僕は日常生活に深く関わる年中行事という物を今だ良く知らず、だからこつそりと情報を集めてさり気なくイベントに参加出来る様に日々これ努力しているのだ。

「どしたの、散歩？」

「いや、煙草切れたから買って来る。何か買う物はあるか？」

「んー、特にないかな」

「じゃあ行ってくる」

「うん、もう帰ってこなくても良いよー」

「……行ってくる」

煙草屋なんか徒歩30秒の所にある。ドクトルのところまで行った

としても、（恒例行事である喧嘩を勃発を含めても）長くて2刻だ（メイドさんが止めるから）。

なのに何で。

「何である人は帰って来ないんだ!!」

既に家を出てから5刻が過ぎている。外に出る度に誘拐やらカツアゲやらテロやら暗殺や拉致に会うトラブルメーカーといえど、幾等何でも遅過ぎる。この間あった、報告書提出の帰りに偶然猫（認識票着きただし削れて読めない）に懷かれ飼い主を延々探して真夜中過ぎに帰宅した時、心配の余り探しに出て暴走して留置所行きになつて『手続きは10刻〜20刻にお願いします』と書かれた案内書に呆れてでも落ち着かせる為にわざわざ巡官に喧嘩売って仲良く朝まで冷たい牢の中で過ごした時に浴びた罵声から学んだ、友人や行き付けの店を廻るといふ事を実践してみる。

運の良い事に高々8件目（日頃の行動範囲からすると驚異的だ）にして目的の人物に巡り会えた。それは喜ばしい事だが何もマスターが虎視眈々と狙い続けて早幾年、な所へ行かなくても！と安堵と絶叫を練り混ぜた酷く重さのある溜め息を吐いた事を良く覚えている。

カロンカロンと酷く癪に障るドアベルを鳴らし扉を開くと、入り口から直ぐ眼に着くカウンターに突つ伏する失踪者と何故か僕の顔を見てほっとした表情のマスターが目に入り。

そしてカウンターにずらりと並ぶ古今東西年代問わずの様々な酒瓶（そして直に床に置かれた樽）の数々を眼にして思わず扉を閉めた。眩暈がした（その値段と本来酒なぞ梅酒ですら酔う体質に）。

こちらが何とか言葉を捻り出そうとする前にいそいそと（常に常備な顔に張り付けた嗤いでなく）本来の笑いを見せながら勢い良く扉を蹴り開けたマスターは、何故か小声で更に耳元で告げた。

曰く、5時間前から飲み続け。発する言葉は酒と注げ、のみで。ガパリガパリと出した酒の全てをほぼ一息に飲み下し。ついさっき仕事と一言呟いて据わった目付きで店を出ようとすることを必死に引き

留めて。担当者が来るのを待っていたのだ、てめえ一体何やりやがった！？？ と徐々にと音量は上がり続け最後は怒鳴り声にて長い説明口調な台詞をノンブレスで言い切った。顔に微笑みを浮かべたままで。

「や、えつと、…人違いです」

「ンな訳あるか！」

「だって何あれ僕あの人がお酒飲んで寝てないのって初めて見るよ！？」

「俺だつてそうだよ、取り合えず必死こいて引き留めたんだからとつとと引き取れ！」

「ええズルいよそれ！」

「うつせ良いから行けオラ！！」

蝶番が緩んだ扉から押し込まれ更に鍵を掛けられた。当事者を見ると、自分には何の関係もないとばかりにこちらを完璧に無視して、残り少ないのかまどろっこしくなったのか酒樽を担ぎ上げて煽っている。

（うわー、やばいってアレ！！ 弱いくせに！）

「や、こんな所に残るって言ったら、僕の安心の為にここ完膚なきまでに破壊してくよ僕！？」  
文法がおかしい。

「お前が戻ってこなくて良いつつたから公司でありったけの任務こっちに廻せつつって来た。そしたら少し待ってって言われて時間空いたからここに、」

「まん、ぐ、せつ」

「街中、ってか店内で召喚はやバいつて！！」

マスターの悲痛な叫びが聞こえた気がした。が、気の所為だと切り捨てた。構っている時間はない。ここで説得しなければ、絶対に暫くの間行方を眩ましてその間中を使ってでも僕を嵌めようと何か案を練られる。今回は今回だけに、尋常ではない規模で綿密に建てられる。それだけは絶対に阻止しなければ！！

街中での召喚は本来なら謹慎処分なのだが、その前に受けた膨大な依頼（ここぞとばかりに面倒臭い物ばかり廻された）（Aランクの傭兵は、総数は少ないが概ね超個性的なものが多い。一度依頼をこなせば入ってくる金額も下位の傭兵とは比べ物にならないくらいなので金銭に困っているものも少なく、主に興味や好奇心がひかれたものしか受けない。ために今回の『ありったけ』という指定のない依頼請求に誰よりも歓喜したのは傭兵ギルドの職員だったりする）の為に、一時的な力の封印をされて仕事へと送り出されたというわけだ。

そして話は冒頭へと戻る。

終劇（040926）（080413 改定）。

1刻〓一時、2刻〓二時、5刻〓五時といった感じ。1刻〓一時間とも考える。

公司は傭兵のギルドのようなもの。公司の中の一部署が傭兵の派遣その他を担っている。

## 行方不明者の不在

「おいそこのクソ猫。都合悪い時ばっか変化してんじゃねエよ」  
「に、にゃ〜ん」

「いや、寧ろクソ犬かもな。人のケツばっか追い掛け廻しやがって、  
てめえが迷子になってりやどうしようもなく阿呆らしいとは思わね  
エのか？」

「んな、」

「しかもそこ等のガキですら迷ってパニクって公共物破壊はしねえ  
よなア」

「…んな〜お」

「あア、思わないから今ここにこうしてぶち込まれてんだよなア。  
悪かったよ当たり前前の事言って」

「んにゃ〜ん…」

「ま、牢屋の中でマズイ飯でも喰いながら暫くたっぷり考えるが良  
いさ」

「にゃおん!？」

「あア? そんなに嬉しいのか、俺も嬉しいぞ」

「ぎにゃ〜!!」

「俺は割と猫好きだし? 迷ってんのを飼い主探してやる位には。  
邪魔臭エクソわんこともここで漸くおさらば出来るし、今日はここ  
一番に最良の日と言っても過言じゃねエかもしれねエ」

「に、」

「安心しとけ、保釈金の支払いがなくても大体一巡り位で釈放され  
るから。暫くの宿と食事が確保出来て良かったなア!」

「ち、ちょ、」

「ちやーんと部屋は引き払っとくから安心しとけ?」

「待つ、」

「てめえは今日限りで破門だ。じゃあな、達者で暮らせ」

「待つてー！ 御免なさい僕が悪かったです赦してー！！」  
「あー、俺も歳かねえ幻聴が聞こえるよ、普通猫は喋らねエもんなア。暫く休暇取るのも良いな、この所無駄に面倒事が多かったし」  
「待つてー！ 置いてかないでようー！！」  
「はっはっはっ！。じゃ、俺は行くから。おーい、看守！！ 金銭はあるからとつと開けに来い！」  
「待つてー！！！！」

終劇（041026）。

万愚節で出ていた牢の中での一晚の話。因みにこの後、泣き落としと脅迫と一廻りの役割分担の負担で家出を阻止した模様。  
一巡り＝一週間、一廻り＝一か月、くらい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9034/>

---

師匠と弟子

2010年10月14日17時56分発行